



With you

ウィズユー

日本国連HCR協会ニュースレター

No.5 2005年 第2号



目次

- スーダン南北内戦が終結 2
- 続く人道危機 ダルフール
- スリランカから「ありがとう！」 3
- アフリカ難民に水を！ 4
- アフガン帰還民に家を！
- 帰還が進むリベリア/トーゴからの 5
- 難民流出
- 「助っ人講師養成講座」
- ご寄附の方法いろいろ
- ダボス会議での呼びかけ 6
- 「世界難民の日」登録イベント

帰還が進むリベリア →5ページ



ギニアから帰還するリベリア難民
UNHCR / P. Flomoku

スーダン南北内戦が終結 難民の帰還始まる



UNHCR / Y. Moriya

学校で遊ぶ子どもたち。スーダン南部のイエイ村。

UNHCR 駐日地域事務所

連絡調整担当 守屋 由紀

3月30日から4月12日まで、アジア福祉教育財団難民事業本部 (RHQ) が実施した「スーダン南部調査」に参加しました。

スーダンは、アフリカで最大の面積を有する国で、国境を9カ国と接しています。1956年に独立しましたが、首都ハルツームのある北部のイスラム政権と反体制派の対立や、南部に発見された石油の利権などから、南北の争いが絶えませんでした。

それだけに、今回出会ったスーダンの人々は、2005年1月9日ようやく調印された和平協定を歓迎し、平和への期待にあふれていました。

UNHCR (国連難民高等弁務官事務所) は1968年からスーダンに事務所を構えています。和平協定調印以前からスーダン

南部にも事務所を設け、すでに日本人職員5名 (そのうち女性が4名) がスーダン国内で活躍しています。

スーダン南部では、南北内戦の終結を受け、



修復を待つ学校
UNHCR / Y. Moriya

戦火を逃れていた住民が帰還を始めていますが、インフラはほとんど整備されていません。内戦以前に存在していたものも、破壊されたのです。街中は破壊された建物ばかりが目につきました。それにもかかわらず、すでに約60万人 (20万人のスーダン難民と40万人の国内避難民) が戻り、帰還が本格化し始めています。

帰還のために地元コミュニティを強化することは、帰還民の保護と再統合にとって切り離せない課題です。UNHCRは、スーダン南部にすでに戻っている60万人に加え、周辺国へ逃れたスーダン難民55万人とこれから帰還するであろう国内避難民に対する支援を実施するために、給水・衛生・教育の分野を最重要課題として、スーダン政府、「スーダン人民解放運動 (SPLM)」、地元自治体、国際機関、NGO (非政府組織) と協力して準備を進めています。

地元コミュニティの強化とは、例えば、井戸を修理する場合、コミュニティによる維持・管理ができるような技術指導も実施することです。ここでは水汲みは主に女子の仕事です。井戸があれば、遠くまで水を汲みに行く必要がなくなり、

女子も学校に通える時間ができるようになります。このように、給水事業が教育支援につながる実態を、肌で感じることができました。学校に行けるか否かは、難民キャンプから出身地に帰還するかどうかを決める上でも大切な判断基準となっているようです。

4月11日にノルウェーのオスロで開かれたスーダン支援国会議でUNHCRは、スーダン南部に帰還を希望する難民に必要な条件を整え、雨季の終わる9月には本格的支援を開始できるように国際社会に緊急資金協力を訴えました。難民の帰還および再定住支援のために6000万ドルを必要としているものの、4月末現在まだ800万ドルしか集まっていません。

毎日気温40度を超えるスーダン南部は、生活環境が厳しいうえに、地雷除去からインフラ整備まであらゆることをこれから始めなくてはならないのです。

スーダンの人々は、かつて敗戦から立ち直り復興した経験を持つ日本に大変良いイメージをいただいているようです。同じ道を歩んで来た日本人として、できる限りスーダンの復興を支えて行かなくてはならないと感じています。

続く人道危機 スーダン西部ダルフール地方

20年以上続いたスーダンの南北内戦が終結した一方で、ダルフール地方では2003年以来、アラブ系民兵が非アラブ系住民の村々を襲撃する人道危機が続いています。隣国チャドに逃れたスーダン難民は21万人を超え、ダルフールの国内避難民は約180万人に上ります。

まだ治安が回復されないダルフール地方で、UNHCR (国連難民高等弁務官事務所) のコミュニティ・サービスを担当しているマーブ・マーフィさんのインタビューを紹介します。

Q. マーフィさんが勤務するダルフール地方では、すでに約200万人が難民・避難民となって故郷を追われましたが、マーフィさんはどのようなお仕事をされていますか？

A. 私はコミュニティ・サービスを担当しています。キャンプや村々を訪れ、どのような

問題に避難民の人たちが直面しているのかを見つけて、私たちの援助プログラムがそのような問題解決に結びついているかを確認します。そして、他の国連機関やNGO (非政府組織) と協力して改善していきます。

Q. 今、何が一番必要ですか？

A. 水や医療、衛生、教育など必要なものはいっぱいありますが、まずは治安の回復です。

Q. マーフィさんの仕事で何が一番困難ですか？

A. 全てを失った人、家族を目の前で殺された人、そういった多くの苦難に日々直面している人たちと話をすることが一番辛いです。

Q. 今まででもっとも印象に残る経験は？

A. 印象に残っていることはいっぱいありますが、たとえばキャンプで、12歳の子どもが生まれて初めてボールで遊んでいる姿を見たこと。女性センターを立ち上げ



UNHCR / K. McKinsey

村を追われて木陰に身を寄せる国内避難民

るとき、それを必要とする女性たち自身が一生懸命働いていて、そのお手伝いできたことです。

Q. ダルフールの避難民の人たちになにをしてあげたいですか？

A. 希望を与えたいです。希望を持続ければ、平和が戻ったときに故郷の村に帰り、もう一度生活をスタートさせることができますから。

スーダン難民支援

ご支援ありがとうございました。
ご寄附：844万356円 件数：435件
(2005年1月1日～4月30日)
スーダン難民・避難民への支援は「スーダン難民」とご指定ください。

Thank you from Sri Lanka

スリランカから「ありがとう!」

スベア・イブラヒムさんは、スリランカの東海岸に住むUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)の職員です。2004年12月26日の朝を一生忘れることはないでしょう。津波の第一波が村を襲ったとき、彼は家族とともに家にいました。「人々は、『海が来る!』と叫び、あちこちがパニック状態でした。私たちも内陸に向かって走り始めました。」

数え切れない人々の生活が急変し、スベアさんの村では約1000人が亡くなりました。

生き残った人たちのために、スベアさんは悲しみにくれているわけにはいきませんでした。彼には、歴史的規模の救援活動においてやるべきことがありました。

ぐずぐずしてはいられない!

スベアさんは自分の家族の安全を確認するやいなや、担当しているアンバラ地区の状況を調べ始めました。そこには、家を失い、焼け付く太陽にさらされている数千人の人々がいました。彼は素早く、ビニールシートや生活必需品をトラックに載せ、被災した人々に届けました。

津波直後の混乱の中、スベアさんのように経験豊かなUNHCR職員は、自分たちも被災者であるにもかかわらず、救援活動に取りかかりました。



数か月にわたるテント生活の後、UNHCRが提供した新しい仮設住宅に移った津波被災者家族(スリランカ・アンバラ地区) UNHCR / C. Fitch

現場での即時対応

UNHCRは、この緊急事態に対応する上で特殊な立場に置かれていました。なぜならUNHCRの本来の職務は自然災害の被災者支援ではなく、難民支援だからです。しかし、スリランカでは約20年にわたって、長引く内戦によって故郷を追われた国内避難民40万人を援助してきました。

すでに現地に倉庫や配給網を持っていたので、UNHCRは、救援物資をもっとも必要としている場所にもっとも効果的に届けることができました。

数時間のうちに、国内にあるすべての倉庫から、最初の緊急援助物資が運び出されました。

生活必需品の配布

まず最初に、倉庫の援助物資をすべてトラックに積み込み、死者やけが人の運搬を助け、援助を必要としている地域への物資供給を手配しました。

次の段階では、UNHCRは仮住まいの供給に乗り出しました。大惨事の真っ最中に、ビニールシートとテントを10万人以上に配布しました。

多くの人々はすべての家財道具を失いました。そこでUNHCRは、マットレス、調理器具、蚊帳、衣服も16万人以上に配布しました。

その後、普通の生活に戻る手始めとして、屋根付仮設住宅を建設しました。

感謝

UNHCRの緊急募金アピールに多くの皆様が応えてくださったおかげで、スベアさんのようなUNHCR職員は、すぐに仕事に取り組みことができました。「津波被災者に支援を提供できたことを誇りに思います。UNHCRがその場になければ、被災者の方々がこのような援助を受けることは不可能でした。私たちは被災者の人たちと共に働きました。みんなUNHCRをよく知っていて、頼りになることがわかっていました」とスベアさん。

インド洋大津波被災者支援の緊急アピールに対して、多くの皆さまからご寄附をお寄せいただいたことに、心から



津波直後に援助物資を配るスベア・イブラヒムさん(青い帽子) UNHCR / P. Ganapragasam

感謝申し上げます。4月末までの寄附総額は6390万円に上ります。

UNHCRは、インドネシアのアチェ州での救援活動からは3月末に撤退することになりましたが、津波発生以前から国内避難民や帰還民を援助していたスリランカとソマリアでは、引き続き活動を続けています。

津波被災者支援

ご支援ありがとうございました。
ご寄附: 6390万4224円 件数: 2066件
(2004年12月27日~2005年4月30日)

アフリカ難民に教育を!

日本では4月に新学期を迎え、子どもたちが元気に学校に通っていることでしょうか。難民の子どもたちの多くは学校に行くことができません。UNHCRは学校教育の支援も重視しています。



勉強するソマリア難民の女性たち UNHCR / W. Stone

ご支援ありがとうございました。
ご寄附: 360万4150円 件数: 73件
(2005年1月1日~4月30日)

アフリカ難民に水を！

チャド東部のスーダン難民キャンプにたどり着き水を飲む男子の子
撮影：HCR協会 / 井上清治



チャド

21万人以上のスーダン難民が避難しているチャド東部はサハラ砂漠の周辺部に位置し、「世界でもっとも乾いた土地のひとつ」といわれています。川などの地表水はなく、水の確保が非常に困難です。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）のチャド東部におけるスーダン難民支援予算の12%以上が給水事業にあてられています。

水脈を探る衛星写真やレーダー技術を駆使し、現場職員の努力も相まって、最悪の事態は脱しましたが、それでもUNHCRが目標とする難民1人15リットル/日の支給は困難です。人口過密キャンプの状況改



UNHCRが修復したポンプ（スーダン南部）
UNHCR / Y. Moriya

善のため、UNHCRはあらたなキャンプ地を求めています。水が確保できるかどうかはキャンプ地選びの重要な要素です。

6月から9月頃まで雨季に入りますが、この地域の地層は水を蓄えるのに適しておらず、すぐに流れ去ってしまいます。しかもキャンプ内の仮設トイレの汚物が流れ出て、衛生状態が悪化し伝染病の原因になるなど、雨季は必ずしも恵みの雨をもたらしません。

UNHCRは限られた水資源が枯渇しないように注意を払いながら、引き続き、スーダン難民の水の確保に努めています。なおかつ負担を強いられているチャド地元民にもキャンプ内の給水場を開放しています。

ソマリア

ソマリアでは1991年から内戦が続き、多くの住民がエチオピアやジブチやケニアに避難していましたが、2002年以降ケニア政府をはじめとする国際社会の働きかけにより、比較的落ち着きを取り戻しまし

た。約100万人が故郷に戻り、UNHCRはその半分以上の帰還を支援してきました。

ソマリアは就学年齢の子どもの1/5しか小学校に通うことができず、20%の子どもたちが5歳の誕生日までに亡くなっています。そして全人口の75%が安全な飲料水を口にすることができません。内戦中に給水施設が破壊されたためです。

UNHCRはNGO（非政府組織）と共に給水施設の復旧に力を入れています。たとえば、水が確保できないために人が住めなくなったソマリア北西部のジエラ地区で5本の井戸を再掘削し、いくつかの給水施設を復旧しました。そのおかげで数千人のソマリア難民がこの地区に戻ることができました。

まだ周辺国にいる多くのソマリア難民や国内避難民が安心して故郷に再定住できるように、給水施設の復旧など、国際社会の支援が必要とされています。

ご支援ありがとうございました。
ご寄附：237万2070円 件数：227件
（2005年1月1日～4月30日）

アフガン難民の帰還支援

アフガン帰還民に家を！

「25年間は長かった。しかし、アフガニスタンの状況が良くなりさえすれば故郷に帰るつもりでした。誰でも故郷でのより良い生活を望むでしょう」

UNHCRの支援を受けて25年ぶりにテヘランからアフガニスタンに帰還したアリ・ファタヒさん。

アフガニスタンやイランの暦では3月21日が「新年（naw roz）」にあたり、冬の終わりを告げます。気温の上昇とともに雪解けも進み、新しい活動が始まります。つまり厳しい冬の間、活動が制限されていたイランやパキスタンのアフガン難民が、故郷を目指して帰還を始める時期でもあります。

2002年に始まったUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の支援プログラムで故郷へ帰った多くのアフガン難民と同じく、アリ・ファタヒさんとその家族には、交通費が支給されました。テヘランからバスに揺られ、アフガニスタン西部の国境の町イスラムカーラにあるUNHCRの帰還支援セン

ターを経由して、ヘラートへ帰り着きました。

アフガニスタンの新年は学校の新学期の始まりでもあります。テヘランで生まれたファタヒさんの6人の子どもたちは、アフガニスタンの学校に通うのは初めてです。「異国」の新しい環境に適応しなければなりません。ヘラート郊外のこの学校では12～20歳が一緒に勉強していますが、全員がイランで生まれ、最近、家族とアフガニスタンに帰ってきました。子どもたちは、まだ貧しくて失業率が高く、住宅も不足している故郷で生活することは困難だと理解しています。ファタヒさんの16歳の長女フェリシタさんは新しい環境に戸惑いながらも「でも、ここでは私はもう難民ではありませんから」と話していました。

半年前に家族とヘラートに戻った未亡人のカワールさんは、子どもが通う学校で清掃の仕事をしています。「わたしたちは避難先のイランでも苦労したし、アフガニスタンに帰った今も予想以上に苦労しています。でも、少なくとも故郷にいる今のほうが居



学校で勉強するアフガン帰還民の少女たち
UNHCR / L. Slezić

地がいいですよ」とカワールさん。

UNHCRヘラート事務所の所長バーニー・ドイル氏は「UNHCRの役割はアフガニスタンに帰ろうとする人々の帰還と彼らが出身地で再定住できるように支援することです。アフガニスタンの状況は改善されつつありますが、まだまだ困難に直面しています。アフガニスタン政府や他の国連機関、NGO（非政府組織）と長期的な解決策を模索しています」と述べています。

UNHCRはアフガン難民の帰還をさまざまな形で支援しています。HCR協会はその中でも特に帰還民の住宅再建支援の募金活動を2002年10月より継続しています。

ご支援ありがとうございました。
ご寄附：260万9892円 件数：63件
（2005年1月1日～4月30日）

帰還が進むリベリア

西アフリカのリベリアでは1989年の内戦勃発以降、約20万人が亡くなり、ピーク時には人口の半分以上が難民や国内避難民となりました。何度か和平協定が結ばれては破棄されてきましたが、2003年8月の和平協定の成立後、武装解除が進み、内戦から逃れていた人々のうち約1万人が最近になってようやく故郷に帰り始めました。

彼らはUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)が支給する食糧や日用品、家屋を再建するための工具類を受け取り、周辺国のガーナ、ギニア、ナイジェリア、シエラレオネから帰還しました。今後3年間で約34万



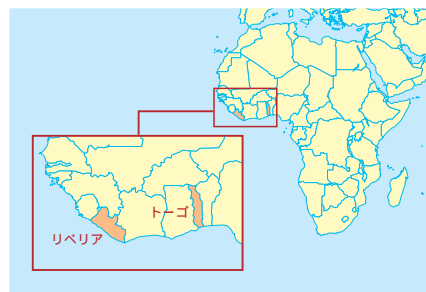
ギニアから帰還したリベリア難民
UNHCR / P. Flomoku

人が故郷へ帰還すると思われ、多くの援助プログラムが予定されています。

トーゴからの難民流出

西アフリカのトーゴでは、4月26日の大統領選挙の結果が発表された後、治安の悪化を懸念した人々の流出が続き、UNHCRは即座に3人からなる緊急チームを東隣のベナンに派遣しました。

5月4日には、5000人分の救援物資を載せたUNHCRのトラック8台が、備蓄倉庫のあるガーナからベナンに到着しました。蚊帳、テント、毛布、ビニールシート、マット、ポリ容器、キッチンセット、石けんなどが配布されます。ベナンの難民キャンプでは、トイレやシャワー、給水設備の増設が進み、



支援者の声

昨年、新潟県で震災に遭われた支援者の方からメッセージをいただきました。

新潟中越地震により、かなりの被害があり、保健センターにしばらく避難しておりました。現在、主人が入院中ですが、病床に付き添いながら、この通信欄を書いております。避難生活を経験し、難民の人々の苦勞が少しわかったようです。(新潟県 俵山敏子様)

編集部：ご自身が大変なときに、世界の難民にご寄附をお寄せいただき、誠にありがとうございました。職員一同、俵山さんのメッセージに心を動かされました。一日も早いご快復を願っています。

難民の半分を占める子どもたちのために遊ぶスペースも確保されつつあります。

一方、西隣のガーナでは、ほとんどすべての難民が親戚や知人から住むところなど基本的な援助を受けています。

5月10日現在、トーゴから東隣のベナンと西隣のガーナにそれぞれ1万人以上が逃れましたが、新たな流入は減少しています。

「助っ人講師養成講座」

HCR協会では助っ人会員の方々に、難民問題やUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)の活動について、学んでいただく「助っ人講師養成講座」を開催しています。過去4回の講座で計40名の助っ人講師が誕生しています。

第5回「助っ人講師養成講座」のご案内(予定) / 日時: 2005年7月13・20・27日(水) 19:00~21:00 / 場所: UNハウス6階 ミーティング・ルーム / 対象: 全3講座参加可能な助っ人会員 / 定員: 10名

* 募集要項をご希望の方は、HCR協会へEメールまたはFAXでお申し込みください。

助っ人講師による難民の絵本出版

一人の講座修了生の呼びかけに応じて、職業も年齢もさまざまな9人の助っ人講師有志が集まり、難民に関する絵本『ほんのすこしの勇気から 難民のオレアちゃんが教えてくれたこと』が出版されることになりました。

この絵本は、ある日クラスに転校してきた難民の「オレアちゃん」の隣の席になった「わたし」が、ほんのすこしの勇気を出したことをきっかけに難民問題への理解を深め、周りに優しい輪を広げていく、たくさん

の発見に満ちたかわいい絵本です。難民についてのQ&A付。

お問い合わせは、(株)求龍堂 TEL 03-3239-3381まで(6月20日刊行予定)



『ほんのすこしの勇気から 難民のオレアちゃんが教えてくれたこと』(HCR協会監修) 1000円(税別) 四六判

ご寄附の方法いろいろ

日本国連HCR協会はUNHCRの日本における公式寄附窓口です。

以下の方法でご寄附を常時お受けしています。ご寄附は税控除の対象となります。

郵便局(振込手数料はHCR協会がお支払いする「加入者負担」です)

郵便振替口座: 00140-6-569575

加入者名: HCR協会

銀行 UFJ銀行 青山支店 普通口座 5251034 三井住友銀行 渋谷駅

前支店 普通口座 3478195

口座名(・共通): エイチシーアールキョウカイ

銀行からのお振り込みはお名前の一部しか表示されません。受領証やニュースレター発送のため、必ず皆様のご住所等をHCR協会へお知らせください。

毎月倶楽部

毎月自動引き落としによるご寄附。1000円以上(千円単位)でご協力ください。

ご希望の方には申込書をお送りします。

遺贈および相続財産のご寄附

遺贈や相続財産のご寄附をお考えの方は当協会にご相談ください。パンフレットをお送りします。

インターネット/クレジットカードホームページでお申し込み後、郵便局やコンビニでお振り込みいただける用紙がお手元に届きます。ホームページ上でクレジットカードによるご寄附も可能です。

<http://www.japanforunhcr.org>

UNHCR親善大使アンジェリーナ・ジョリー

ダボス会議で政財界に難民支援を呼びかける

毎年スイスのダボスで開催される世界経済フォーラム年次総会(通称「ダボス会議」)が今年も1月末に開催されました。ダボス会議は、フォーラム加盟企業・団体のリーダーや政・官・学などからの招待者を含め2000人以上が集まり、世界の政治・経済・人道問題などを話し合う会議です。

UNHCR親善大使アンジェリーナ・ジョリーは、この会議で政財界のリーダーた

ちがその影響力を行使して、難民問題を世界の重要議題のトップに押し上げるように訴えました。

過去4年間、親善大使としてアジア、アフリカ、中南米、ヨーロッパで難民援助活動に携わってきたアンジェリーナは次のように述べました。

「インド洋大津波の大惨事から何かひとつ前向きなことを挙げるなら、世界中の人々や組織が驚くほどの規模で被災者支



ダボス会議にて。右からアンジェリーナ・ジョリーUNHCR親善大使、ウェンディ・チェンパレン難民高等弁務官代行、緒方貞子JICA理事長(第8代難民高等弁務官) UNHCR/J. Gubler

援を行ったことです...私たちが今必要としていることは、この気運と寛大さを持続させ、今なお支援を必要としているにもかかわらず、注目されることがない人道危機、たとえばチャドやスーダンにおける絶望的な状況に目を向けることです。」

世界難民の日 今年のテーマは「勇気」



毎年6月20日は「世界難民の日」です。もともと「アフリカ難民の日」であった6月20日は、アフリカ各地の難民キャンプで、難民自身がさまざまな行事を企画して楽しむ一日でもありました。2000年の国連総会によって「世界難民の日」と定められ、2001年以来毎年UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)がその年のテーマを決め、世界各地で難民問題への喚起を呼びかけるようになりました。

平和な生活を送る人々には、自分の勇気を試される機会などめったにありません。難民も普通の人々でありながら、自らの過失ではないのに異常な状況に追い込まれ、自分自身の内なる力を振り絞って、恐怖を乗り越えなければならないのです。

そのような恐怖とは、戦争や迫害から逃れるという差し迫ったものであったり、故郷や愛する者を失う痛みであった

り、逃避の苦しみかもしれません。後には、生活再建の見通しが立たないという漠然とした不安が襲ってきます。

このような危機的状況を生き抜くためには、強さが必要です。ひどい困難にもめげることなく新しい生活を創り出していくには、想像を絶する意思の力が必要です。

難民が私たちの支援を必要としていることはいまでもありません。しかしそれ以上に、難民は私たちが心から尊敬するに値する人々であることを、もっと認識するべきではないでしょうか。

さらに、厳しい環境の中で人道援助活動に従事する現場職員の「勇気」、またこのような現実から目をそむけない皆様一人ひとりの「勇気」を称えたいと思います。

「世界難民の日」登録イベント

今年、日本では初めての試みとして、おもに5月から6月を「世界難民の日」キャンペーン期間と定め、登録イベントを募集しました。呼びかけに応じて全国各地から30を超える登録をいただきました。

UNHCR所蔵の難民写真パネルを使っでの写真展示会、チャリティバザーやコンサート、講師を招いての勉強会や講演会、街頭募金、外国人との交流会など、全国各地でさまざまな催しが企画されています。詳細は、HCR協会ホームページに掲載されています。

2006年も登録イベントを募集していく予定です。皆さんも仲間と一緒に、「世界難民の日」に参加してみませんか。ご質問等は、HCR協会事務局まで。

『シンポジウム・写真展

私たちのなかの「難民」』

2005年6月12日(日) 13:00-17:00(予定)
場所 西鉄ホール

主催/お問合せ NGO福岡ネットワーク

TEL 092-741-9255

共催 UNHCR駐日地域事務所

日本国連HCR協会

「世界難民の日」写真展

「アンゴラ難民とザンビアの人々」

2005年6月18日(土)~7月13日(水)

時間 10:00~18:00 入場無料

休館日 土・日(6月18日を除く)

場所 UNハウス(国連大学ビル)1階、2階

展示内容 沼田早苗氏撮影のザンビアの

ンゴラ難民/アンゴラ難民の帰還/キャンプ周辺の地元民

6月23日(木)は沼田氏のスライド&トークショーもあります(14:00~15:30)。

詳細・お申し込みはUNHCR広報室まで。

主催 UNHCR駐日地域事務所(広報室)

TEL 03-3499-2310

ホームページ www.unhcr.or.jp

後援 外務省(予定)

協力 日本国連HCR協会

認定NPO法人 日本国連HCR協会

[国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)日本委員会]

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-70

UNハウス(国連大学ビル)6階 UNHCR内

TEL: 03-3499-2450 FAX: 03-3499-2273

Eメール: info@japanforunhcr.org

ホームページ: <http://www.japanforunhcr.org>

「With you」No.5 2005年 第2号(6月)

発行人: 赤野間征盛

編集: 榎川勝也、中村恵、井上清治、奥平章子

デザイン・製作: 榎ポイントライン

第5回「助っ人講師養成講座」のご案内(予定)

日時: 2005年7月13・20・27日(水)19:00~21:00 場所: UNハウス6階 ミーティング・ルーム

対象: 全3講座参加可能な助っ人会員 定員: 10名

* 募集要項をご希望の方は、HCR協会へEメールまたはFAXでお申し込みください。